

## W209c WZ Sge 型矮新星の分布

田邊健茲、大谷徳紀（岡山理科大学）

WZ Sge 型矮新星は、そのアウトバースト時に SUUMa 型矮新星と同じようなスーパーハンプを示すが、増光の幅（静穏時との等級差）が 7、8 等と大きいこと、増光の持続期間が長いこと、さらにはアウトバーストの間隔が長く、しかもその間にいわゆるノーマルアウトバーストがほとんどないこと、また軌道周期が短い（約 80 分）などのはっきりした特徴を持っている。

このタイプの激変星は 20 世紀末には数個しか知られていなかったが、近年、急にその数が増加し、2015 年末で 100 個近くに増加した。その理由の一つには自動検出システムが機能していること、そしてかつては写真乾板で古典新星として記録されていたものの多くが、WZ Sge 型であることが判明したことにもよると考えられる。

このタイプの矮新星の空間分布を銀河座標 ( $l, b$ ) で表示してみると、ほぼ等方的でしかも銀河中心方向にほとんど存在しないことがわかった。その理由を明らかにするために、すべての WZ Sge 型星の極大時における光度が等しく、Prototype である WZ Sge ( $45.3 \pm 0.5 \text{ pc}$ ) の極大等級と仮定し、空間分布を求めた。その結果、最も高い位置にある SS LMi が銀河系の Thin Disk 内にあると想定すると、銀河系円盤による強い吸収を考える必要があることがわかった。詳細はポスターで発表する。